



空気はどうして見えないの

大昔は今のようないきではなかった

地球をとりまわっている空気を、大気といいます。大気は、地上1000キロメートルぐら
いまで広がっていますが、地表からはなれるにつれて、だんだんうすくなっています。地球
は約46億年前にできましたが、そのころは、今のようないきではなかったと考えられて
います。そのころの地球の表面の温度は非常に高く、地球のまわりは、水蒸気、二酸化炭素、
ちっ素などの気体でおおわれていました。

地球が冷えて大量の雨が降り、海ができました。それから、植物が現れるようになっ
てきて、大気中に酸素がふくまれるようになりました。長い年月をかけて、今のようないき
になりました。

色のない、すきとおった気体からできている

空気は、いろいろな気体が混じりあってできています。空気の中でいちばん多くふくまれ
ているのはちっ素で、約78パーセントです。次に酸素で、約21パーセントです。そのほ
か、アルゴンと二酸化炭素が少し、それに、ネオン、ヘリウムなどが、ほんのわずかにふく
まれています。どの気体も色はありません。

このように、空気をつくっている物はどれも色がなく、すきとおった気体からできている
ので、空気は見えないのです。もしも、色のついた気体が混じっていたとしたら、見えたか
もしれません。（監修・国司 真）

